

アフリカ・デー・シンポジウム2008
テーマ「アフリカにおける食糧事情：危機から好機へ：アフリカのための新しい展望」

小池百合子衆議院議員基調講演（案）
（平成20年9月9日（火） 9：40～9：55）

国連大学、コンラッド・オスターヴァルダー学長、
アフリカ外交団長・ムタンゴ駐日タンザニア大使、
各国大使閣下、
ご列席の皆様、

1963年にアフリカ連合（AU）の前身であるアフリカ統一機構（OAU）が誕生してから、本年で45年目を迎えます。また本年は、TICADIV及びG8北海道洞爺湖サミットという、アフリカを主要な議題とする大きな国際会議が日本で開催されました。この記念すべき年に、アフリカ・デー・シンポジウムが盛大に開催されることにお祝いを申し上げます。

日本とアフリカは、いま共に食糧とエネルギーという大きな問題に直面しています。特に食糧価格高騰、エネルギーと環境破壊など、これら地球規模の課題に対しては国際社会全体での取り組みが重要となります。日本とアフリカが共に取り組み、より良い解決を探っていくために、本日のシンポジウムは非常に有意義な機会であると確信しています。

近年の急激な食料価格高騰の一要因として、バイオ燃料生産のための食料作物の転用があると言われております。私は本年4月、南アフリカ共和国がバイオエタノールの原料としてトウモロコシを一切使わない方針を表明されたということを知って、大変心強い思いがいたしました。私はかねてより、食料作物を原料とするバイオエネルギーを認めることは、資源の奪い合いにつながり、貧困国での食糧不足や価格高騰、ひいては環境破壊を引き起こすと主張してきました。皆さんはミダス王というギリシャ神話をご存知ですね。ミダス王は、彼が触れたものすべてをゴールドに変える力を神から授かりましたが、パンも果物も肉もすべてがゴールドに変わってしまい、食することができなくなるという話です。ルールなきバイオ燃料の生産はまさに現代のミダス・タッチといえましょう。

私の友人であるケニアの元環境・天然資源副大臣、ワンガリ・マータイさんが、グリーンベルト運動でノーベル平和賞を受賞したことで示したとおり、緑と農業を確保することは、国の安定にもつながっていきます。自然環境を守り、持続可能な農業を行うことは、そこに暮らす人々を貧困と飢えから守り、心を安定させ、ひいては国の発展と紛争回避にもつながるのです。このようなアフリカにおける安全保障、平和構築の観点からも、私は、日本からアフリカへの農業分野での技術移転をさらに積極的に進めるべきだと考えております。

アジア地域と比べますと、アフリカ地域における農作物の生産効率には未だ改善の余地が残されています。アフリカで食されている穀物のうち、近年コメの消費量が増加し、アフリカにおいてコメの生産を確保することが重要になってきておりますが、2005年において、アフリカ地域における1ヘクタールあたりのコメの収量は、アジア地域の半分未満だったというデータがあります。もちろん、アフリカとアジアでは地理、気候、社会経済的な条件に様々な違いがあり、データのみを単純に比較することはできません。しかし今後アフリカにおいて、かつてのアジアで起こったような生産性の向上の余地があるということ、このデータは示しています。

我が国には、古くからの稲作の歴史と技術があります。日本が持つ知識や技術を利用し、アフリカにおけるコメの生産量を増大させることは今後も大いに期待が持てます。

かつて私が留学しておりましたエジプトで、稲作の支援に携わっていた富田豊雄（とみた とよお）さんという方がいらっしゃいました。この方は残念ながらすでに亡くなっていますが、彼は1980年代にエジプトの農業技術研究所で稲作の機械化、特に、機械化栽培に適した稲品種の選定に尽力され、エジプトにおける機械化稲作の標準的な体系を確立した大変有名な日本人でした。彼のような専門家の貢献もあってエジプトのコメの生産性は向上し、今でもエジプトではジャポニカ米が広く栽培されています。

また、タンザニアのキリマンジャロ州において、日本は1970年代から灌漑施設の整備と農業技術センターの建設、技術協力などの支援を行っています。その結果、2001年から2006年にかけて行われたプロジェクト第2フェーズでは、プロジェクトに参加した農家の平均収量を1.4倍に増加させるという成果をあげています。

これら以外にも、日本はアフリカ諸国において「ネリカ米」の開発・普及に対する支援も積極的に行っており、この有望品種によっても生産性の向上を目指しているところです。いずれの例でも、単に日本やアジアの技術をそのまま

持ち込むのではなく、現地の実情に合わせるために、多くの専門家の方々が工夫を凝らしながら取り組んでいます。

本年、5月末に横浜で行われた第4回アフリカ開発会議（T I C A D I V）は、41名の国家元首・首脳級を含むアフリカ諸国の代表をはじめ、開発パートナー諸国、アジア諸国、国際機関及び地域機関の代表、民間セクターやNGOの代表など合計3000名以上が参加した、日本でも例を見ない大規模な国際会議となりました。そのT I C A D I Vでは、日本の対アフリカODAの倍増などの支援策が発表され、今後10年間でアフリカにおけるコメの生産量の倍増を支援することも盛り込まれています。また、7月に行われたG8北海道洞爺湖サミットで発出された首脳声明にも、途上国への農業分野の援助・投資の増加など、様々な中長期的施策の実施が盛り込まれました。

重要なのは、表明されている多くの支援策を着実に具体化していくことです。今後、南南協力のすそ野も広げつつ、日本からアフリカへの技術移転が一層推し進められ、アフリカにおける「緑の革命」の一助となることを、私としても応援していく所存です。

最後になりましたが、アフリカ連合（A U）のますますの発展、アフリカ諸国の繁栄をお祈り申し上げるとともに、日本とアフリカのさらなる協力関係に向け、本日のシンポジウムで有意義な議論が行われることを期待し、私の御挨拶とさせていただきます。

ご静聴ありがとうございました。

（了）

<切り貼りストック>

(アフリカにおける食糧生産効率の例と日本の支援)

さて、アフリカにおける食糧事情に関し、私は皆様に、稲作の生産効率に関する一つのデータをお示ししたいと思います。

食糧問題をはじめとした地球規模の課題に立ち向かうためには、いま地球上に生きる私たちが、共に考え、協力して行動することが必要です。

アフリカでは近年、数種類の穀物のなかでもとりわけコメの消費量の伸びが著しく、需要と供給のギャップが年々拡大しており、多額の外貨がアフリカ以外からの穀物輸入のために消費されています。アフリカにおける食料安全保障を考えるうえでは、アフリカでのコメの生産量を高めることが求められています。

アジア地域の収量も1960年代には2トンを下回っていました。つまり、アジアではこの40年間で生産効率が飛躍的に向上したのです。

今回のシンポジウムでこのような時宜を得たテーマを選ばれた在京アフリカ外交団及び関係者の皆様に、この場をお借りして敬意を表したいと思います。

もちろん、アジアの経験をそのままアフリカに当てはめれば良いといった簡単な話ではありません。しかし、アジアで起こったこの生産性・生産量の大幅な向上が、アフリカでも起こればどんなに素晴らしいことでしょうか。

本年5月末に横浜で行われたTICAD IVにおいてはまさに、アフリカにおけるコメ生産量の倍増が目標として宣言されました。日本からアフリカ、アジアからアフリカへの技術協力が今後一層推し進められることを期待しています。

FAO（国連食糧農業機関）によれば、サブサハラ・アフリカ地域の2003年のコメ生産量（精米ベース）は約807万トンですが、これを自給率に換算すると約55%です。

今年のシンポジウムのテーマ、食糧問題は、環境、農業の問題とも密接に関連した、今最も緊急性のある大きなテーマの一つです。

世界的にバイオエタノールブームが起こり、食糧危機の一つの原因とされている今、地球規模での連携した対策が求められています。南アフリカ共和国

をはじめとしたアフリカの多くの皆様が、この点に関し、私と同じ立場に立ってくださっていることを大変心強く、嬉しく思います。

- エジプトで稲作支援を行った有名な日本人